



No.18

mi.ra.i.e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2016年11月10日発行

編集・発行 出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033 東京都文京区本郷 4-37-18 いろは本郷ビル 2階

TEL 03-3816-2911 FAX 03-3816-2980 E-mail rouren@syuppan.net URL <http://www.syuppan.net/>

沖縄はいま…



「オスプレイパッド」建設を止めよう

真喜志 好一（建築家・沖縄平和市民連絡会）

沖縄はサンゴ礁の海に囲まれ、亜熱帯の湿潤な森という特異な環境にあり、9月に国立公園に指定し、世界自然遺産への登録をめざしつつ、日本政府は真逆の政治をしています。

いまその沖縄で、二つの新たな米軍基地建設が日本政府によって強行されています。

最初に地図で問題の基地建設の位置を示します。辺野古では、ジュゴンも棲むサンゴ礁の海を埋めて軍港付きの米軍飛行場を作る計画が進行中です。

東村高江には、沖縄の水源地のダムがあり、子や孫に残すべき手つかずの亜熱帯の豊かな森を切り開いて、米軍のオスプレイを訓練する着陸帯（オスプレイパッド）を6か所も作るという工事が強行されています。

東村高江での工事強行

豊かな自然を守り、静かに暮らしたいという高江の住民（140人）を中心に2007年7月からテントを張って抗議行動を続けてきました。沖縄担当相・島尻安伊子氏が落選した参院選投票日の翌日（2016.7.11）早朝、県民の民意を無視して座り込み市民を排除、建設用資材を搬入しました。そして7月22日早



朝、警視庁など全国からの機動隊員 500 人と沖縄県警、総勢 1000 人もいわれる機動隊員が県道を機動隊のバスで遮断しました。そして座り込んでいる市民、テントや市民の車を排除しました。筆者も午後に駆け付けたのですが、県道を封鎖され進めなくなりました。

トラックで資材搬入するだけでなく、自衛隊の輸送ヘリで建設重機を森の中に運び込んで工事を強行しています。その様子は「沖縄高江 工事」をキーワードに動画などを検索してください。

すでに完成した N4 着陸帯ではオスプレイの離発着訓練が行われており、その振動と騒音のため隣村に避難した子どもたちもいます。

右上の写真は「やんばる」の森を低空飛行しているオスプレイです。オスプレイのエンジンが発する熱く猛烈な排気で、亜熱帯の湿潤な「やんばるの森」の環境が乾燥し、森の小さな命が奪われます。



上右は、工事の強行で切り開かれた N1 地区の二つのオスプレイパッドです。

9 月以降、水曜と土曜を総行動の日とし、全国からの支援者も含めて抗議行動をしています。またこれ以上伐採されないよう、市民は森に入って樹の前に座り込み伐採を阻止し始めています。

リュウキュウウラボシシジミが生息できる高江・安波の森 宮城 秋乃（チョウ類研究者）

やんばるの森には1000種以上の高等植物と、5000種以上の動物が生息しています。1999年の琉球列島動植物分布調査チームによると、高江地区から22種のやんばる固有種・固有亜種と126種の絶滅危惧種・希少種を含む1313種、および、いくつかの新種と考えられる生物が確認されたそうです。

私が調査しているリュウキュウウラボシシジミというチョウは、国内では沖縄島のやんばる3村（国頭村、^{くにがみそん}大宜味村、^{おおきみそん}東村と^{ひがしそん}石垣島、^{いりおもて}西表島）に分布する固有亜種です。清流の流れる自然度の高い場所に生息し、分布は局所的で、その生息地でも個体数が少なく、準絶滅危惧種に指定されています。本種が生息していればそれだけで自然が豊かであることの証明になります。2011年に、高江で本種が大発生しているのを確認しました。^{あらかわ}新川が流れる森の奥に幼虫の食べるトキワヤブハギの群落があり、そこで発生していたのです。その後は安波の^{あは}宇嘉川^{うか}沿いでも幼虫や成虫を確認しました。個体数が多いので、これまで調査の難しかった生態を詳しく観察することもできました。国内で本種がこれだけ多く観察できる場所は他にありません。高江と安波は国内最大の発生地なのです。

2016年10月現在、高江・安波のN1・G・Hと呼ばれる地区の米軍ヘリパッド建設予定地の木々が大量に伐採されてしまいました。伐採された樹木は破碎機によってチップにされました。伐採された樹木の中には絶滅危惧種やノグチゲラの営巣跡のあるものなどが含まれていたかもしれませんが、証拠は粉々に隠滅されてしまいました。樹木に住みついていた小さな生き物たちの命もこの世から消されてしまいました。切株の多い伐採地はやがて整地されヘリパッドが造成されます。そこに雨が降れば、木の根の支えを失った赤土が宇嘉川の清流に流れ込むことになります。その汚水は本流へ流れ込み、海へと辿り着きます。ヘリパッド建設は森と川と海を壊し、今後も生き物たちのすみかや命を奪い続けるのです。



軍港付きの飛行場をやめさせよう

真喜志 好一（建築家・沖縄平和市民連絡会）

そもそも、普天間飛行場は、1945年沖縄に上陸した米軍が、そこにあった沖縄の住民が暮らしていた住宅、畑、学校などを勝手に潰して作った飛行場です。下の写真は1945年6月頃に米軍が撮影した造成中の写真です。元の地主たちは飛行場の周辺に住まわざるを得なくなり、米軍の飛行場安全基準にも合わない危険な飛行場とされています。



この危険な普天間飛行場を沖縄の人たちが「閉鎖して返せ」と主張することは当然ではありませんか？ 返す代わりに、日本政府の予算（つまり私たちの税金）で「辺野古」の海を埋めて飛行場を作って米軍に提供する、というアメリカ政府と日本政府の合意って変だと思いませんか？

辺野古の飛行場計画は1966年から

ここで、米軍が要求している辺野古の計画を追ってみます。ベトナム戦争の最中の1965年、米軍はもう一つの飛行場を沖縄島に作ろうと調査をしたとの米公文書が沖縄県公文書館にあります。この文書には、島の南側は人家が密集しており飛行場が作れない、北側は山の起伏があって適地ではない、Kushi Wan（辺野古の海を海図では久志湾と記している）を埋めるしかない、と書かれています。

この1965年の調査の結果をまとめて、米海兵隊は66年初めに辺野古のサンゴ礁の浅い海を埋めて3000mの滑走路2本の飛行場

計画を作りました。そして66年暮れに、飛行場に接した深い大浦湾に航空母艦を接岸できる大きな軍港の計画をアメリカ海軍は作りました。これが先に紹介した p.1 の地図にはめ込んだ「1966年の飛行場計画と軍港計画」です。この計画は沖縄県公文書館が所蔵しています。

辺野古計画に隠されている軍港機能

この1966年の計画が現在の辺野古計画にどのように受け継がれているか、日本政府が沖縄県に埋立の承認を求めた文書から読み解いていきましょう。

先に地図で示したV字型の飛行場の大浦湾側に長さ271.8mの「係船機能付き護岸」が記されています。「船を接岸できる護岸」つまり軍港機能が付いているのです。



アメリカ海軍には強襲揚陸艦と呼ばれる軍艦があります。海兵隊、水陸両用戦車、航空機などを載せて敵国に運ぶ軍艦です。

オスプレイのエンジンが発する熱い排気ガスに耐えるように甲板を改造した強襲揚陸艦ボノム・リシャールの全長が257mで、271.8mの岸壁にすっぽり収まります。米海軍の基準書には、風速25mでもこの寸法に接岸できるとされています。

沖縄県民は新基地を建設させることを許しません。高江でテントや車を排除した7月22日、日本政府は沖縄県の「辺野古埋立承認取消」に対する国土交通相の「是正指示」に翁長県知事が応じないのは違法だとして、知事を提訴しました。この裁判は2回目の知事の証人尋問で結審、9月16日に沖縄県敗訴の判決が出されました。県は上告、最高裁に高裁判決破棄を求めてたたかいます。



日米地位協定とは

米倉 外昭（琉球新報文化部記者）

日米地位協定とは、米国の従属下で経済発展をめざす日米安保体制を維持するために、米国による事実上の占領を継続する条約であり、米国のあらゆる特権の源泉である。

正式名称は「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第6条に基づく施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定」。日米安保条約第6条とは「日本国の安全に寄与し、並びに極東における国際の平和及び安全の維持に寄与するため、アメリカ合衆国は、その陸軍、空軍及び海軍が日本国において施設及び区域を使用することを許される」というものだ。

特権は次の6項目にまとめられる。①財産権の保護（日本国は米軍の財産の搜索、差し押さえはできない）②国内法の適用除外③出入国管理の除外④日本側の基地立ち入り禁止⑤裁判権における優先⑥基地返還時の原状回復義務免除。

今年（2016年）4月に発生した沖縄県うるま市の女性暴行殺人事件では、米軍属の元海兵隊員が沖縄県警により逮捕され起訴された。この軍属は基地外に居住しており、任意の取り調べのうえ、逮捕されたので、基地に逃げ込むことも国外へ逃亡することもなく、身柄引き渡しは問題にはならなかった。しかし、基地内の捜査ができず証拠集めなど捜査は難航した。

2004年8月に沖縄国際大学に米軍大型ヘリが墜落炎上した事件では、現場を米軍が封鎖し、地元市長も大学関係者も立ち入りができなかった。勝手に立ち木を伐採し、土を掘り起こして持ち去った。沖縄県警は機体の調査もできず、被疑者の特定もできなかった。

沖縄では基地外に1万人ともいわれる多数の米軍関係者が住む。彼らの出入国を把握できず、住民登録もなく税金も払わず県民の生活圏の中にいる。そこで事件や事故、トラブル

ルが起こる。

当然ながら米軍の「在日特権」は日本中に及んでいる。交通事故で被害にあっても、米軍側が公務中だったと言えば刑事裁判にはならず、民事の賠償交渉も日本の防衛省経由でがちが明かず、泣き寝入りになることが多い。航空法が適用されず、米軍は日本各地で事前通告なしに低空飛行訓練を実施している。空域使用も、羽田空港よりも米軍横田基地や厚木基地が優先されている。

ドイツ、イタリアと米国間の地位協定は何度か改定されている。ドイツでは米軍側に返還時の原状回復義務がある。イタリアではイタリア軍司令官の下に米軍基地が位置付けられ、米軍は報告なしに勝手なことはできない。米イラク地位協定（2009年発効）ではイラクは裁判権保持にこだわった。同じ年に、日本は、海賊対処の名目で自衛隊が初の海外基地を置いたアフリカのジブチとの地位協定で、ジブチに裁判権を放棄させた。

1960年の安保改定で「行政協定」が「地位協定」に改定されて以降、一言一句、改定されていない。沖縄県は長年、改定を要求し続けているが、日本政府は「運用改善」という小手先の対応に終始している。米国に絶対的な特権を与え、絶対に改定しない日本とはどういう国なのだろうか。被害や問題が沖縄に集中しているため国民全体からは不満や抗議はあまり出ない。米軍基地がある都道府県で構成する渉外知事会は地位協定改定を要望し続けているが世論は盛り上がりせず、政府は動かない。

米国従属下で軍事化を押し進めながら海外の利権を追うという戦後日本のいびつな姿が、今ほど露骨になっている時代はない。「日米地位協定」とは何か、それは何のためにあるのか。それを考えることは、今を生きる日本人の義務ではないだろうか。



しまくとぅば復興

謝花 直美（沖縄タイムス編集委員）

「いい正月で一びる」

「うちなーんちゅ うしえてい ないびらんどー」。

前者は人々を呆れさせた仲井眞弘多前知事が発した言葉、後者は人々を奮い立たせた翁長雄志知事の発言だ。2013年末、仲井眞氏は安倍首相と会談し、辺野古新基地を巡り復興策予算がついたことを先のように表現した。前知事が、ポロリと発したしまくとぅばが世間の響感をかった。仲井眞発言として流行語になった言葉は、2014年知事選での大敗に影響したと見られた。しまくとぅばが抱く語感のズレを識者は「『いい正月』と言われても我々は違う。我々は（新しい年に）生まれ変われるのか。そう感じた人が多い」と分析した（沖縄タイムス 2014年 12月 28日）。

翁長知事の手紙は、2015年5月、辺野古新基地に反対する県民大会で約 35,000 人の人々を前に発された。基地を絶対につくらないという共通語のスピーチを終えると、満を持して「うちなーんちゅ うしえてい ないびらんどー」と絶叫した。総立ちとなった会場から指笛、拍手が数分間も続いた。直訳すれば「沖縄人をなめてはいけません」。知事が公の場で、しまくとぅばで怒りを発したのは、県政史上初だったに違いない。母語を奪われ、共通語では怒りが一息ついてしまうという識者は「沖縄の人も、とうとうここまでやれるようになったんだな」と感慨深く語った（沖縄タイムス 2015年 5月 31日）

「しまくとぅば復興元年」と呼ばれた 2013 年は、沖縄県が県民大会を開催し、「普及推進計画」を策定し、関係団体が「しまくとぅば連絡協議会」を結成、気運が盛り上がった年だ。2006年に県議会が条例で「しまくとぅばの日」を制定していたが、具体的な施策がなかった沖縄県を動かしたのは、民間団体の粘り強い取り組みだ。2000年に結成された

「沖縄方言普及協議会」（現沖縄語普及協議会）は学校ボランティアを育成、各地の団体が学習を続けている。

翁長知事は那覇市長時代の 2012 年、那覇市でしまくとぅばであいさつをする「ハイサイ・ハイタイ（こんにちは）」運動を展開した。今や会合の挨拶をしまくとぅばで始めるのは当たり前になった。沖縄タイムスが「週刊しまくとぅば新聞」を特設、日本トランスオーシャン航空や沖縄都市モノレールもアナウンスに取り入れている。2015年にはしまくとぅばで全てを放送するラジオ局も誕生した。

しまくとぅばを取り戻そうという動きは自己決定権を求める動きとも重なる。

2009年、ユネスコが琉球諸島の六言語（奄美、国頭、沖縄、宮古、八重山、与那国）が絶滅の危機にあるとした衰退の状況は、明治政府が琉球国を併合した「琉球処分」以降 130 年かけてつくりだされた。人々は同化のために標準語を強制された。徴兵や出稼ぎと移民という国民意識が問われる状況で、生存のために自発的に求めていった。学校で罰として使用された「方言札」は、戦後も「復帰」を目標とした教育現場で使用され、子どもたちに劣等感を植え付けた。

しまくとぅば復興は、負の歴史を克服しようという取り組みだ。米軍基地問題、沖縄戦を巡る歴史認識、この 20 年沖縄の人々は自らの進む道を選べず、人々が生きてきた歴史経験も否定されてきた。沖縄学の伊波普猷は 1947 年最後の著書『沖縄歴史物語』で「地球上で帝国主義が終わりを告げる時、沖縄人は『にが世』から解放されて、『あま世』を楽しみ十分にその個性を生かして、世界の文化に貢献することが出来る」と書いた。しまくとぅば復興とは「にが世」からの解放を求めた文化運動といえる。



映画「ザ・思いやり」

思いやる相手も順番も金額もムチャクチャじゃないですか！

太田 伸幸（出版ネット関東支部長・フリーランス編集者）

阪神淡路の震災ボランティアで知り合った S 君とは、もう 20 年近い付き合いになるのですが、いま「ザ・思いやり」の上映事務局をやっている、以前は「日本の〇空」とかの社会派映画の会社にいたのだけれど、映画の内容と裏腹のブラック企業で給料は思い切り支払われず、鬱になって映演ユニオンに相談して未払い賃金を支払わせたという苦労人でもあり、「おーたさんの組合でも上映会やってくださいよ〜」と頼むので、私としては、S 君にも新しい仕事でなんとか生活を立て直してほしいという義侠心から支部委員会に提案したところ、皆さん、いいね、やろやろという話になり、S 君もそれは嬉しいですね〜というから、てっきりお友だち割引でもしてくれるかと思いきや、正規の上映料金を請求されたのですが、上映会当日はどういう訳か組合外部の人もたくさん観に来てくれて、50 人近い大盛況となったのでした。上映後のトークでは、配給担当の平沢清一さんと、アメコミ調のポップな映画パンフを作成した映像クリエイターの伊藤ニコラさんがこの映画との関わりなどについて語ってくれ、普段聞けない裏方さんの貴重な話が聞けました。

この『mi・ra・i・e』を読まれている方は思いやり予算についてはよくご存じでしょうが、早い話、ヤクザのミカジメ料ですよね、アレは、まあ額は桁違いですが。ヤクザは自分たちのシノギのためにミカジメ料を徴収するわけで、シマ（縄張り）の人々の平和と安全のために他所の組と戦争する訳じゃないことぐらい V シネマを観なくてもわかります。

このミカジメ料、防衛省の年間予算は 1860 億円ほどですが、それに基地周辺の対策費や交付金、米軍再編への負担金……と積み上げてゆくと、「思いやり予算」を含む在日米軍駐留経費の我が国負担分はなんと 8911 億円

（2015 年度）。1 秒あたり 28,257 円の支出です。まったく我が国の先行きが「思いやられる」予算です（山田くん座布団！）。

映画では、この予算がどのように使われているか、次々とその実態が明らかにされます。京急神武寺駅の米軍専用改札、基地内の学校、ゴルフ場やレジャー施設、横須賀の原子力空母の母港化のための施設費……etc. 今も仮設住宅暮らしを余儀なくされている東日本大震災の被災者が、ゴージャスな米軍向け住宅の映像を呆然と見つめる印象的なシーンから、歪な日米関係が見えてきます。その歪さの象徴が今の沖縄でしょう。

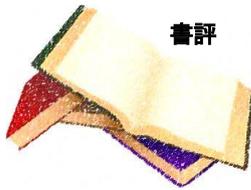
世界中に展開する米軍の果たしている役割は何なのか？ 原発事故が収束せず、震災の復興にも程遠いこの国で、まず何に対してお金が使われるべきなのか？

米軍のイラク侵攻の映像に衝撃を受け、基地問題を考えるようになったというリラン・バクレー監督（日本語ペラペラ）は、在日米国人の視点で、分かりやすく面白く、マジメに問いかけていきます。他所の上映会で監督のトークを聞きましたが、ユーモアたっぷりの話は面白く、今も各地の上映会に飛び回っています（講師料金別途）。

この映画、88 分とそれなりに尺が長く、上映した後にみんなで語り合う……というスタイルだと長くてちょっと厳しいと思われるかもしれませんが、60 分ちょっとの短縮バージョンもあるのでいろいろな集まりで気軽に活用してもらえれば、と、S 君に代わって宣伝させていただきます。

（注）「ザ・思いやり」を上映してみたいと思われたら下記のアドレスをのぞいてください。予告編もあります。

<https://zaomoiyari.com/about/>



書評

『カクテル・パーティー』

大城立裕 著 2011年9月 1040円+税 岩波現代文庫

『カクテル・パーティー』は沖縄の作家・大城立裕が1967年に発表し、芥川賞を受賞した。主人公の男は娘が米兵に強姦されるという事件の当事者として、苦悩と怒りの沖縄を映し出す鏡となり、私たちを捉えて放さない。それは米軍統治下の沖縄を舞台にしているにもかかわらず、今私たちが目の当たりにしている沖縄の現実と通底しているからだ。

この小説の特異なところは、前章と後章でその視点ががらりと変わることである。前章の「私」は、中国人や一流紙の特派員らと、米軍人に招待された基地内の鶏尾酒会（カクテル・パーティー）の場での、欺瞞的親善関係を描いている。

ところが、帰宅し、制服が破られた娘を見てからの後章では、主人公の「私」は180度転回し、二人称のしかも「お前」として突き放される。さらに話は複雑になる。被害者は加害者で

あり、加害者は被害者である。そこに日本軍将校の過去を持つ主人公と中国人との、日本軍と沖縄人との過去が絡み合う。そして米軍統治下の沖縄という、ごちゃ混ぜ酒の宴（カクテル・パーティー）が展開するのだ。

娘が晒し者になる勝ち目のない告訴に踏み切るお前。その絶望を超えるものは何か。このことを私たちに突き付けてくる。根本的な解決は基地を撤去させること、戦争の根源をなくすことである。その主体は私たちである。

（小山比路志）

*琉球列島米国民政府布令 144号では、「合衆国軍隊要員である婦女を強姦し、または強姦する意思をもってこれに暴行を加える者は、死刑または民政府裁判所の命ずる他の刑に処する」。沖縄の民衆はやられっぱなしで、逆は死刑！ 占領とはかくも残酷であることをこの法律は示している。



前に進むことはこわくない

猪狩 茜（福島県双葉郡川内村出身、松戸市在住）

東日本大震災から5年が経ちました。

この文章を書くために、震災当時の午後のことを思い出そうとしていますが、正直なところ、うまく思い出すことができません。それは私のなかで、確実な深い傷となっていることは事実ですが、震災のことすべてをなかつたことにしているわけではありません。

私はあの時、家が地震の揺れで軋み、今まで耳にしたことがないような音を立てて揺れているのを聞きましたし、「死」というものをあんなにも間近に感じたこともありませんでした。いつでも楽天的な母が泣いているところを初めて目にしました。頼りがいのある父が、不安そうにしているところを初めて見ました。妹の愛想のよさが、あんなにうらやましいと感じたこともありませんでした。

私は、当時も今も「被災者」と呼ばれることが好きではありません。その言葉は、すべて元通りとはいかなくても、少しずつ前へと進んでいる私たちの行動を、時間を、決意を、縛りつけているように感じるからです。『あの日』から動くなと言われていたようで、私は少しだけかなしい気持ちになります。

抗うことのできない自然災害によってすべてを奪われ、あの日、私たちは迷子のように途方に暮れていました。しかし、今はどうでしょうか。私たちは今、ひとりでしょうか。今がいちばんしあわせではないかもしれませんが、まだ、何も取り戻せていないかもしれません。しかし、私たちの手を、あなたの手を、握り返してくれるひとがいるのではないのでしょうか。その手を、離してはいけません。もう何も失いたくないのなら、苦しくても、前へ、明日へ、進んでいくしかありません。あなたのことを想っているひとたちが、きっといるはずです。

🍷 編集後記 🍷

大阪府警の機動隊員が発した強烈な差別発言で、大手メディアも多少はとりあげるようになった辺野古と高江の米軍新基地建設強行の実態ですが、本土に住む私たちは現在の沖縄が抱える問題をどのくらい知っているのでしょうか。米軍基地があるが故に引き起こされる事件・事故を、度重なる選挙で示された「基地NO!」の民意を、無法な基地建設強行に身体を張って抗議する姿を、基地建設で破壊される豊かな自然を、私たちは「遠い島の出来事」として見過ごしてはいないのでしょうか。民主主義を標榜する国の市民として、沖縄の現状を看過することは許されません。現地で住民とともに基地建設反対の行動にとりくむことは重要ですが、本土で「基地撤去、新基地反対」の声を上げることも大切です。そのためには、メディアが伝えない実態を知ることが必要です。今号は高江・辺野古の現状報告、環境問題としての基地建設、地位協定という現代の不平等条約、抑圧の象徴でもあった「しまくとぅば」の復興、思いやり予算の理不尽さなどをとりあげました。「醜い日本人」とならないために。(T)